

研究成果報告書

1. 研究概要

児童生徒が自らの個性・特性を知るための「アセスメント」と自分らしい学び方を試すことができる「探究プログラム」を軸とした「かまくら ULTLA^{*}プログラム」の実施を通じ、学校内外における個別最適な学びの在り方（特に、学習の個性化に関すること）について研究する。また、地域の方々や教職員等を対象とした、探究プログラムの理念やノウハウに関するワークショップ研修を開発し、地域社会全体で児童生徒が特性を発揮しながら学べる場づくりを進める。

^{*}ULTLA=Uniqueness Liberation Through Learning optimization and Assessment（学びの最適化と評価による個性の解放）の略。

2. 研究内容

（1）研究課題

（研究領域 1）学校内での取組に関すること

- ☒ a 単元内自由進度学習や異年齢集団による学習、理解の状況に応じた課題の設定など、特異な才能のある児童生徒をはじめ子供の関心等に合った授業や学習活動の在り方
- ☐ b 特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方
- ☐ c 児童生徒が普段過ごす教室や学校内の他の教室等、指導・支援に取り組むための多様な学びの場の設定や連携の在り方や、過ごしやすい居場所としての環境整備・人的サポート等の在り方
- ☒ d 特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方
- ☐ e 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応の在り方

（研究領域 2）学校と学校外との連携に関すること

- ☒ f 学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導・支援の方法
- ☐ g 特異な才能のある児童生徒に支援を提供するための学校外の機関の在り方や、その機関と連携して学習を行う際の学習状況の把握や学習評価の在り方
- ☐ h 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応

（研究領域 3）児童生徒を取り巻く環境の整備に関すること

- ☒ i 教職員への研修の在り方や、保護者、地域社会の理解の醸成の在り方
- ☐ j 各主体が保有する情報集約や、主体間の情報連携・共有の在り方
- ☐ k 児童生徒の機微な情報の共有の在り方、進学時の情報の引き継ぎなど学校段階間の連携の在り方

（2）研究における取組

<内容>

ア アセスメント

児童生徒自身の学び方、主に認知特性、関心領域、思考スタイル、好奇心スタイルの4分野における特性を把握するため、学術的な根拠に基づいたアセスメントを実施し、個々の児童生徒の学びの特性を言語化し、包括的に明らかにした。

アセスメント結果はその時の心理状態・興味関心等によって変化していくことが考えられることから、毎回のプログラム実施前後にアセスメントを実施するとともに、一定の時間が経過した後に児童生徒及び保護者にアンケート等による追跡調査を実施することで、アセスメントの有効性や児童生徒の変容について検証した。

イ 探究プログラム

教育委員会と再委託業者が連携して、個別最適な学びを実現する探究プログラムを開発・実践した。

探究プログラムの開発にあたっては、自然環境、寺社仏閣などの歴史遺産、地元企業や地域で活躍する人材等の鎌倉が持つ豊富な教育資源を活用し、「海」と「森」をテーマにそれぞれ3日間実施した。

探究プログラムは①アセスメントを活用して自分の個性・特性を知る「自分学」、②鎌倉市の自然や文化等を題材にして自分らしい学び方を試す「探究」、③学びの成果を他の参加児童生徒や大人たちと共有する「発表」の3要素で構成した。

探究プログラムの運営にあたっては、主に進行を担う「ファシリテーター」、専門的知識を活かした講義・活動を提供する「ナビゲーター」、児童生徒に寄り添って学びをサポートする「コミュニケーター」が参画するとともに、教育委員会の職員も連携しながら児童生徒が安心して学びに没頭できる環境を作り、実践した。こうした探究プログラムを学びの多様化学校（不登校特例校）における教育課程などの公教育や、地域の事業者が実施するワークショップ等で実践するための要素等について研究した。

ウ 成果発表会（ULTLA インパクトデイ）

①プログラムの趣旨や当日の学びの共有、②希望する児童生徒の成果発表、③自らの個性・特性により不登校等の困難を経験した方からの講演等で構成される成果発表会の実施を通じて、児童生徒の個性・特性に合わせた個別最適な学び（学習の個性化）に関する児童生徒、保護者、教職員及び地域の教育関係者の理解を醸成する場の在り方等について研究した。

エ 学校との連携

プログラムに参加した児童生徒の当日の様子や写真・映像、アセスメント結果を在籍校や教育支援教室に共有することで、当該児童生徒の指導・支援の充実に繋げる学校と教育委員会の新たな連携の在り方について研究した。

オ ワークショップ研修

かまくら ULTLA プログラムの取組を、学校現場は勿論、公教育の場以外の学びの場においても広げ、地域の理解を得ることで、地域の中で共に児童生徒を育成していくという考えから、学校教職員や鎌倉市に在住する児童生徒の学びに関わる方々を対象にプログラムのストーリーや探究活動の構築・運営ノウハウ

ウ等に関するワークショップ型の研修を実施し、地域社会と学校との連携や地域社会の理解の醸成の在り方について検証した。

特に、令和6年度は受講者が自らのフィールドでかまくら ULTLA プログラムの要素を体現できるよう、より実践に繋がる研修の在り方についても研究した。

カ 外部事業者との連携

かまくら ULTLA プログラムは、毎月の会議設定、アジェンダ作成、企画立案など、教育委員会が強力に主導しながら再委託業者と一体となって運営した。教育行政の新しい在り方として、教育委員会が主導しながら事業者の持つ専門性を最大限発揮して、高度な教育実践を構築する新たな教育行政モデルについて研究した。

キ 保護者との共有・連携

学校との連携と同様に、児童生徒の個性・特性や活動の様子等について保護者と共有し、連携することが教育支援の充実に密接に繋がると考えられることから、保護者と教育委員会の連携の在り方について研究するため次に掲げる取組を行った。

- ・探究プログラムの3日目に保護者を招待して児童生徒の様子を見てもらうとともに、コミュニケーターから児童生徒の活動の様子等についてフィードバックした。
- ・アセスメント結果を保護者に共有するとともに必要に応じて丁寧に相談に応じた。
- ・成果発表会（ULTLA インパクトデイ）に保護者を招待してプログラムの趣旨や取組についての理解を深めた。
- ・保護者アンケートやインタビューを実施した。

<経過>

4 月	【探究プログラム（海・森）】
5 月	・プログラムの開発に着手
6 月	【ワークショップ研修】
7 月	・ワークショップ研修の開発に着手
8 月	【探究プログラム（海・森）】
9 月	・参加者募集開始
10 月	・アセスメント（1 回目）の実施
11 月	【探究プログラム（海）】
12 月	・海のプログラム参加確定者の学校における様子等に関する情報収集
1 月	・海のプログラム（3 日間）の実施
2 月	・海のプログラム終了後、アセスメント（2 回目）を実施
3 月	・海のプログラム終了後、児童生徒及びその保護者にアンケートを実施
4 月	【探究プログラム（森）】
5 月	・森のプログラム参加確定者の学校における様子等に関する情報収集
6 月	・森のプログラム（3 日間）の実施
7 月	・海のプログラム終了後、アセスメント（2 回目）を実施
8 月	・森のプログラム終了後、児童生徒及びその保護者にアンケートを実施
9 月	【ワークショップ研修】
10 月	・ワークショップ研修の実施
11 月	【事後アンケート】
12 月	・参加児童生徒及び保護者への事後アンケート実施
1 月	【成果発表会（ULTLA インパクトデイ）】
2 月	・成果発表会（ULTLA インパクトデイ）の実施
3 月	・対象生徒・保護者へのインタビュー実施
4 月	【その他】
5 月	・アセスメント、探究プログラム及びワークショップ研修の効果検証
6 月	・研究成果報告書の作成

3. 実証研究の成果や課題

<成果>

(1) アンケート

かまくらULTLAプログラムを通じた児童生徒の変容等に係る効果測定を目的として、各プログラムの実施前後にアンケートを実施した。アンケート結果を通じて、次の考察を得ることができた。

ア 自分らしい学びが見つかった度合いについて

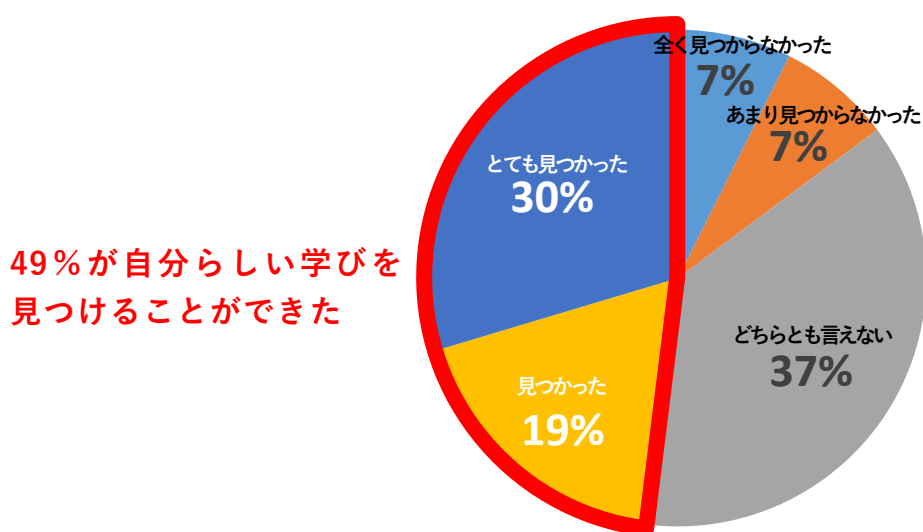
各プログラムの実施後に「自分らしい学びが見つかったか」について、「とても見つかった」から「全く見つからなかった」の5段階評定で参加児童生徒に回答を求めたところ、49%の児童生徒が「とても見つかった」「見つかった」と回答し、「全く見つからなかった」「あまり見つからなかった」と回答した児童生徒が14%に留まった。このことから、プログラムに参加した一定の児童生徒が「自らの個性・特性に合った学び」を見つけることができたことが分かった（グラフ①）。

この要因としては、①プログラムの中で児童生徒が自由に学習方法を選択できること、②プログラムのコンテンツに多様性があり、自分らしい学び方を様々な形で試す機会があること、③特性があることを踏まえながら寄り添うことで、児童生徒が心理的安全性を感じながら自分らしく学びに取り組むことができたことなどが挙げられる。

また、約半数が「どちらとも言えない」「見つからなかった」と回答しており、今回のプログラムのコンテンツに興味関心を抱けなかったり、そもそも「自分らしい学び」という抽象的概念が難しく、回答しにくかったりしたのではないかと推察される。

【グラフ①】

自分らしい学びが見つかりましたか？



n = 27

イ 学びへの志向性について

「学ぶことが好きですか」という質問について、「とても好き」から「全く好きではない」の5段階評定でプログラム直前および直後に回答を求めたところ、プログラム直前では「とても好き」「好き」と回答した割合が合計で37%であったのに対し、プログラム直後では合計で58%と21%上昇した（グラフ②）。プログラムに取り組む中で、参加児童生徒の学びに向かう姿勢が前向きになったことが伺える。

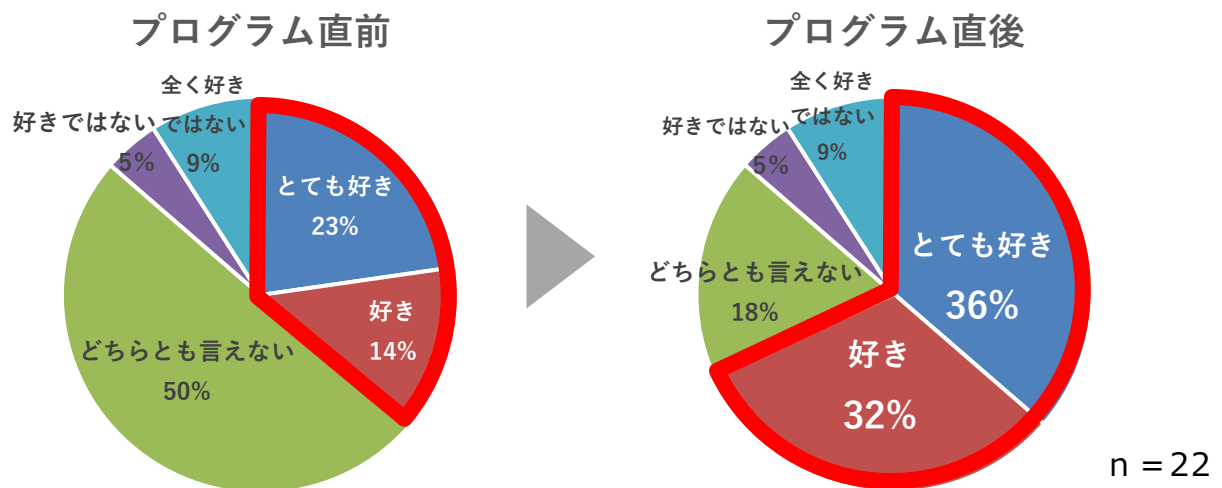
学びが好きである理由としては、「新しい知識が増えて楽しいから」、「学んで知識を得てわからなかったことがわかるようになったり、新たな興味が湧いたりするから」、「新しい物を生み出す材料になるから」、「自分の考えや他の人の意見や考え方により深く共感できたり、まったく新しい発見や考え方ができるようになるから」といった声が挙げられた。

こうした声から、プログラムが①様々な分野で活躍する専門家（ナビゲーター）による体験を主軸とした学びを提供していること、②多種多様なコンテンツが参加児童生徒の興味関心や特性に沿った学びを提供できていることなどが学びに向かう姿勢を前向きにする要因として考えられる。

また、「好きではない」「全く好きではない」と回答した児童生徒は、ア「自分らしい学びが見つかりましたか」の質問に対し「見つからなかった」「全く見つからなかった」と回答しており、自分らしく学ぶことが、学びへ向かう姿勢を育むことも伺える。

【グラフ②】

学ぶことが好きですか

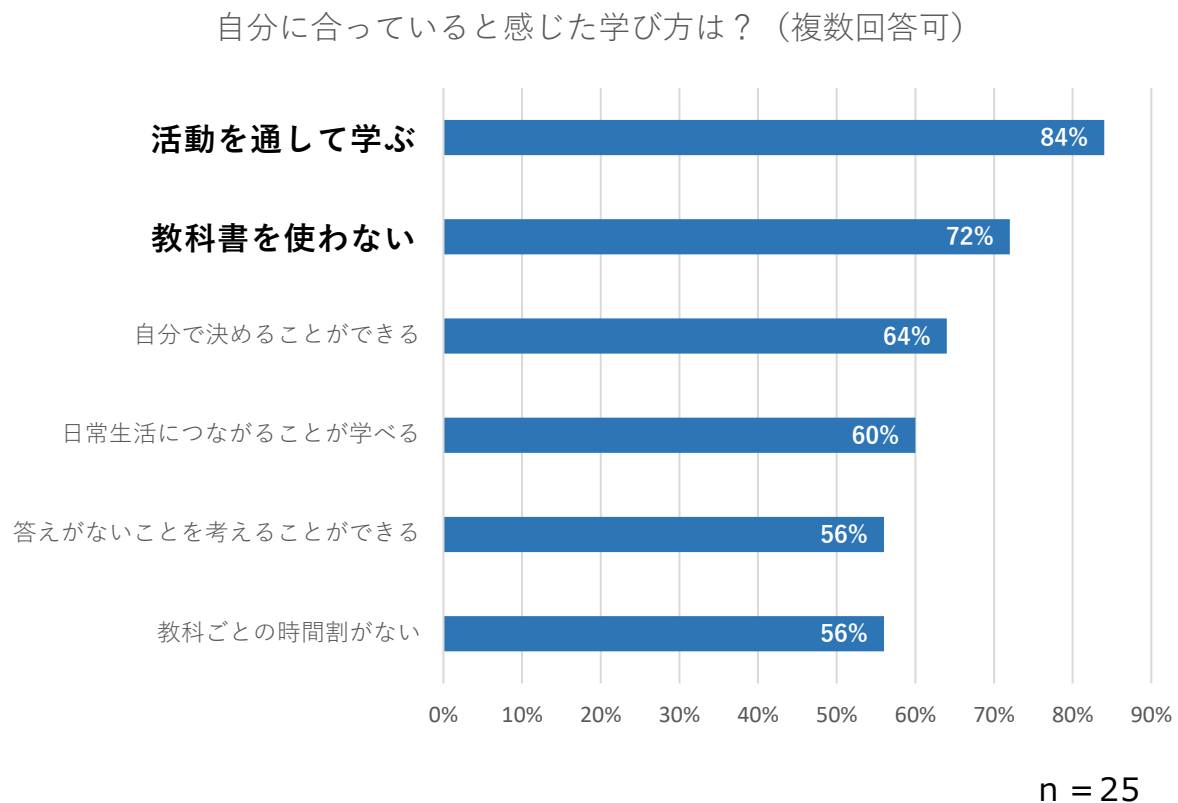


ウ 自分に合っていると感じた学び方について

「自分に合っていると感じた学び方」についての質問では、「活動を通して学ぶ」「教科書を使わない」と回答した割合が高かった。（グラフ③）

この結果から、自らの特性に起因して学校での学習に馴染めない児童生徒に対しては、①教科書の内容に囚われず学習できる内容が選択的であること、②体験型の学習ができることが有効であることが伺える。

【グラフ③】



（２）アセスメント

プログラムの実施前後において児童生徒の興味関心領域、認知特性、思考スタイル等に関するアセスメントを行うとともに、アセスメント結果を「学びのポートフォリオ」としてまとめてプログラム当日に配付し、「自分学」を通じて読み解き方を参加児童生徒へ教示することで、自身の学び方の傾向について把握しながら自分に合った興味の対象や学習方法・学習環境を調整できるように意識づけを行った。

さらに、事後調査として、参加した児童生徒及び保護者にアンケートを実施した。アンケート結果を通じて、次の考察を得ることができた。

ア 児童生徒のアセスメントの活用について

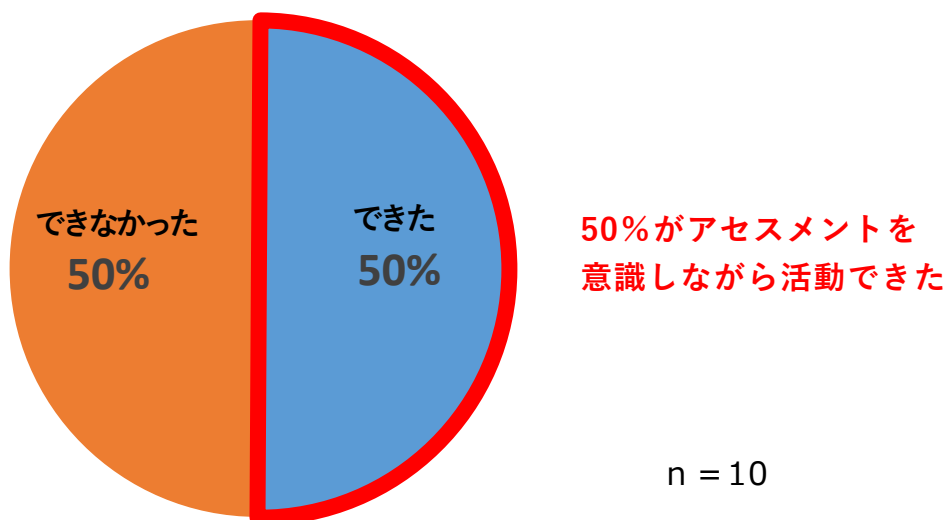
「アセスメントの内容をプログラム中に意識したり、活用したりすることができたか」について参加児童生徒に回答を求めたところ、ちょうど半数が「できた」と回答した。（グラフ④）

プログラム中に「書いて覚えるのが好きなのにノートがなくて嫌だなと何度か思った。」「積極的に話すことを意識した。」など自分の得意不得意を意識しながら取り組めた様子が見え、自分に合った学び方を見つける一助となっていると推察できる。

しかしながら、半数の参加児童生徒は「できなかった」と回答しており、アセスメントの提示方法やプログラム中の声かけ等にさらなる工夫が必要だと言える。

【グラフ④】

「学びのポートフォリオ」に書かれていた内容（得意なやり方や心のクセ）を、プログラム中に意識したり、いかしたりすることができましたか？



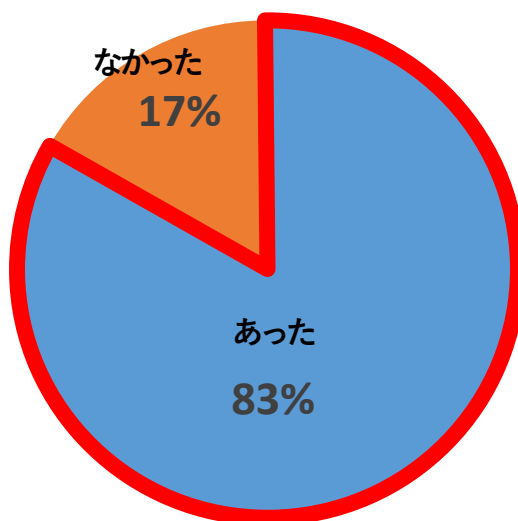
イ 保護者のアセスメントの活用について

「アセスメントの内容を家庭で話題にしたり、参考にしたりすることはあったか」について保護者に回答を求めたところ、83%の保護者が「できた」と回答した。（グラフ⑤）

「感想を聞いているときに見せてくれて、こういうとこ当たってるよねって話をしました。」「能力に凸凹があることを本人も理解しているので、日常的に得意なことをどんどんやるように勧めていて、自分に合ったこと、もの、方法を選ぶように話をしています。」「本人そのままだと思う部分があった反面、意外な部分もあり驚きました。アプローチを変えてみようと思いました。」等の声が寄せられ、家庭における子どもへの理解やよりよい支援につながっていることが伺える。

【グラフ⑤】

「学びのポートフォリオ」に書かれていた内容（得意なやり方や心のクセ）を、ご家庭で話題にしたり、参考にしたりすることはありましたか？



n = 12

（３）個別最適な学び（学習の個性化）の在り方

本プログラムの対象は「学校における学習になじめず、不登校あるいは休みがちとなっているなど、学校に通うのがつらいと感じている児童生徒」となっている。実際今年度の参加児童生徒の 76%が不登校状態にある児童生徒であり、その多くが本人の学習特性に起因していると推察される。そのような児童生徒にとっての個別最適な学びの在り方として、次のような考察を得ることができた。

ア 学習方法・コンテンツについて

前述のとおり、本プログラムではプログラムの実施前後において参加児童生徒の興味関心領域、認知特性、思考スタイル等に関するアセスメントを行うとともに、プログラム当日の「自分学」を通じてアセスメントの読み解き方を参加児童生徒へ教示することで、自身の学び方の傾向について把握しながら自分に合った興味の対象や学習方法・学習環境を調整できるように意識づけを行っている。

参加児童生徒はプログラムを通じて、自分の「特性」「強み」「興味関心」を意識しながら学び方等を選択する。勿論、児童生徒によっては自身の興味関心等とプログラムのコンテンツや学び方の選択肢がマッチせず、学びに消極的になる場面も散見されたが、自分の興味関心や学び方にマッチしたときには、自身の強みを大いに発揮しながら学びに没頭していく姿が多く見られた。

学習特性の強い児童生徒にとっては、自ら学ぶ対象や学び方を「選択できる」ということが大切であり、個別最適な学びにつながるという見解を得た。

イ 学習環境について

本プログラムでは、教育委員会が事前に学校から参加児童生徒の学校での様子や学習特性等について聞き取りを行っている。そして学校から得た情報や事前アセスメントから得た情報を、学びを支援するスタッフ間で共有し、個々の支援方策を共通理解した上でプログラムを実施している。個々の参加児童生徒の特性を理解した上でありのままを受け入れ、寄り添い支援することで、参加児童生徒が心理的安全性を感じながら学ぶことができる環境を構築している。

参加児童生徒の多くが、学校生活において自身の特性に起因する人間関係のトラブルや学習面等の課題を抱え不登校状態や不登校傾向にあるにもかかわらず、本プログラムに参加し、さらに参加児童生徒の多くがリピーターとなっている状況から考察すると、こういった児童生徒が安心して自分らしさを発揮しながら学ぶことができる学習環境を望んでいることが推察される。

（４）カリキュラムと教科学習の紐づけ

本プログラムで実施している探究プログラムは、教科学習の内容と相互につながる視点を意識して設計している。探究プログラムにおける学びを教科等の学びに活用したり、関連づけたりすることで、より一層学びが深まったり、活用できることを実感できたりすることが期待される。探究プログラムに取り組む中でも、取り組む内容がどの教科とつながっているか、あるいはどのように活かしていけるかを考えさせる場面が多く用意されている。

以下の表１は、探究プログラムの活動内容と、教科との関連性を示したものである。プログラムの構成を検討する際に様々な教科の内容へとつなげることで、プログラムコンテンツを広げたり深めたりすることができた。

また、表２の事後アンケートからは、探究プログラムに取り組むことでプログラムのコンテンツについて更に深く学びたいという意欲や、興味関心が広がりコンテンツにつながるのある内容を学んでみたいという意欲が生まれた様子が伺える。

これからの時代に求められる資質・能力を育む上で、教科横断的な視点で学習活動を編成することは特に重要である。本市において令和７年度に開校する学びの多様化学校においても教科横断的な探究学習を実施する予定であるが、本プログラムで得た知見を存分に活かしていきたい。

【表１】

海のプログラム	
プログラム内容	教科内容
大地を彩る石のフシギ	「火山活動と火成岩」「地震と大地の変動」「地層と大地の歴史」（理科）
石がつく食べものな－んだ！？	「身近な生物の観察」「動物のなかま分け」「生物の変遷と進化」「生物の成長と増え方」（理科）
太古からの生き証人！記憶をもつ石の知られざる正体	「身近な生物の観察」「光の性質」「動物のなかま分け」「生物の変遷と進化」「生物の成長と増え方」「遺伝の規則性と遺伝子」（理科） 「年代の表し方」（社会）
石で引いた粉と鎌倉野菜と材木座の塩の共演！	「日本の諸地域」「消費生活と市場経済」（社会） 「調理実習」（家庭科） 「地球の運動と天体の動き」（理科） 「漢字の成り立ち」（国語） 「地域の食材と食文化」（家庭科）
自然の色は何色？石が生み出す色彩の世界	「表現」「日本画」（美術）
鎌倉の「石神」さまに会う	「日本の諸地域」「日本の成り立ちと古代文化」（社会）
玉手箱に「意思」をこめよう！	「表現」「日本画」（美術） 「自分の思いを伝える」（国語）

森のプログラム	
プログラム内容	教科内容
自分の中の原石発掘！	「心身の機能の発達と心の健康」（保健体育）

	「地層と大地の歴史」（理科）
一石、雑穀、にぎり飯	「単位」「比例」（数学）「食の歴史」「道具の発展」（社会）「日本の食文化」（家庭科）
鎌倉を生んだ石たちの姿	「火山活動と火成岩」「地震と大地の変動」「地層と大地の歴史」（理科）「日本の諸地域」（社会）
宇宙の宝、石をはって窯を作ろう！	「消費生活と市場経済」（社会）「献立作成」「調理実習」（家庭科）「表現」（美術）「自分の思いを伝える」（国語）

【表 2（児童生徒向けアンケートから抜粋）】

今回のプログラムで学んだことが役立ちそうと感じることはありましたか？
・ 今後海に行った時などに石などを探してみたいと感じた。 ・ 海を守るために役立ちそう。 ・ 人前で話すこと。 ・ 私は学者とかの仕事に興味があるから、本物の学者に会えたこと。
新しく興味がわいたことがありましたか？
・ 地学の勉強を怠っていましたが地層とかやってみたいと思いました。 ・ 自分の身近なところから宇宙まで深く関わっている石について興味が湧いた。 ・ いろんな石があって面白かった。 ・ 石の模様や触り心地。 ・ 楽器。 ・ 石を顕微鏡で見ること。 ・ アウトリガーカヌー。 ・ 古代の暮らしと石の関係。 ・ 石器作り。 ・ 黒曜石。 ・ ピザ作り。
これからどのような学びをしてみたいですか？
・ 自分の環境にあった学び方をしたい。 ・ 物作り。 ・ 海で海の生き物をたくさん見てみたい。 ・ 学校で教科書やノートを使う。 ・ 自分らしさを出すのと自然とのふれあい。 ・ 外などで活動して学ぶ。 ・ 興味が生まれたこと。 ・ 色々な場所で未知のことを体験し、知りたい。 ・ 森についての勉強。 ・ 農業高校で酪農のこと。 ・ 行った事がないようなところで様々な研究をしたい。 ・ こんな感じの学びをしたい。 ・ 川で魚捕りしたい。 ・ 貝殻で、色々やってみたい。 ・ 黒曜石で斧作りたい。 ・ 鎌倉市で地方公共団体について勉強してみたい。 ・ 未知の世界を広げるための発展した学び。 ・ 川とかに行き行って生き物探し。 ・ 自分の世界を知識で広げる学び。 ・ とにかく挑戦し、自分が満足するまで続ける。 ・ 星とか星座を学びたい。

（５）学校と教育委員会の連携の在り方

（３）イで前述したとおり、本プログラムの実施前には教育委員会が学校から参加児童生徒の情報を得ることで、プログラムにおける支援の充実に活かしている。

また、鎌倉市教育委員会では、児童生徒の特性と学校における学習内容・学習環境の不一致を不登校の要因の１つとして捉えていることから、不登校児童生徒の支援・不登校の未然防止のためには当該児童生徒本人の特性と学習環境・学習内容のマッチングが重要であると考えている。

この考えに基づき、在籍校における当該児童生徒に最適な支援方策の検討に資する情報として、アセスメント結果やコミュニケーターから集約した児童生徒のプログラム中の様子、プログラム当日の写真・動画等を指導主事から在籍校に共有するとともに、これらの情報の活用例を学校に共有することで、在籍校における支援の充実に図っている。

（６）地域社会等との連携・理解の醸成

児童生徒の特性に合わせた個別最適な学びを実現するための地域社会との連携・理解の醸成の在り方について研究するため、かまくら ULTLA プログラムの要素を地域に根付かせることを目的としたワークショップ研修（かまくら ULTLA リサーチラボ）を昨年度実施し、学校教職員の他、フリースクール等地域で子どもたちの学びに関わる方（以下「地域の方」という。）が 10 名参加した。

今年度の探究プログラムを作っていくにあたり、地域の方と共にプログラム作りを行うための定期的なミーティングをリサーチラボとして開催する計画を立てた。昨年度のワークショップ研修に参加した地域の方から希望を募ったところ 6 名の申し込みがあり、リサーチラボメンバーとして今年度のプログラム作りに携わるとともに、プログラム当日もスタッフとして子どもたちの支援に関わった。

また、昨年度同様のワークショップ研修（かまくら ULTLA リサーチラボ）を今年度も実施し、教職員 9 名、地域の方 6 名が参加した。ULTLA の学びを共有し、地域の方と共にプログラム作りについてアイデアを出し合い理解を深めた。

これらの活動を通じて、教育委員会、学校、地域の方間のネットワークを広げることができた。令和 7 年 4 月に開校する本市の学びの多様化学校で行う探究プログラムにおいても、このネットワークを存分に活用していく予定である。

＜課題＞

（１）ULTLAの学びを学びの多様化学校へ

本市では、令和７年４月に学びの多様化学校として鎌倉市立由比ガ浜中学校を開校する。この由比ガ浜中学校のスクールビジョンとして「自分らしく学び、自分らしく成長できる学校」を掲げ、一人ひとりの個性・特性に応じた教育を実施できるよう、総合的な学習の時間を「かまくら ULTLA プログラム」の要素を取り入れた新教科「ULTLA」として再設定し、コアカリキュラムとして位置付ける。今までの ULTLA プログラムは３日間のスポット的な学びであったが、今後学校の教育課程の中でどのように実践できるかを学校とともに研究していきたい。

また、従来の ULTLA プログラムも形を変えながら継続していく予定であり、由比ガ浜中学校における新教科「ULTLA」と「ULTLA プログラム」が有機的につなげながら共に発展できるよう取り組む所存である。

（２）ULTLAの学びを持続可能なかたちへ

学校に通うのが辛く、学校以外の学びの場を必要とする子どもたちに、ULTLA の学びが届くように、周知を図ってきたところであるが、参加者数の伸び悩みが課題の一つであった。「普段学校に行けていない子どもたちにとって３日間のプログラムは参加へのハードルが高いのではないか」と分析し、来年度以降より多くの子どもたちが参加できるよう海・森それぞれ２日間のプログラムへと短縮する予定である。

また、現在はプログラムコンテンツ作りを外部事業者と教育委員会が協働して行っているが、より地域の人的リソースを活用しながら実施できるようネットワークづくりやノウハウの共有を図っていきたい。